

## プロローグ

もしも貴方が、よこしまな気持ちで小学校の教師を目指しているのなら、やめた方がいい。  
もしも貴方が、純粹に子供たちを正しい方向に導きたいという気持ちで小学校の教師を目指しているのなら、やめた方がいい。

僕——あらかわすむ新川獎とまるは小学校の教師だ。この兎丸小学校で去年から働き始めて、三年一組の新任になった。

小学校の教師——と言っても僕はまだ入って二年目の新人なわけで、通常の人の業務内容とは違うかもしれないが、僕の場合は七時には学校に来て、授業に使うある程度の資料の確認とまとめを行って、時計の長い針が半ごろを刺したのを確認したら、校門の前にまで行って登校してくる児童たちに挨拶をする。

児童たちは教科書の入った重そうなランドセルを、さながらピラミッドづくりのために勤しむ労働者のような顔で背負いながら、校門前で待ち構えている僕たち先生を伺い、迫りくる挨拶を歩きながら待つ。

「おはよう！」

元気よく、笑顔浮かべて、朗らかに。

子供たちに見られているところで、少しでも気だるげな姿を見せたら、そこから一気に舐められかねない——などと、隣にいる二年先に入っただけにも体育とコミュニケーションが得意科目ですという感じの尾田先生から脅されてしまうと、そうせざるを得ない。

「まだ固いですねー。笑顔いきましょ！ 笑顔っ！」

尾田先生はニカツとした自分の顔を指さして僕に注意して、背中をバシバシと叩いてくる。

おはよう、おはよう、おはよう、と笑顔を浮かべる壊れたロボットになりながら、続々と登校してくる小学生たちに、少子高齢化つてやつは本当に起きているのか、僕は疑問を抱いていた。

「にしても新川先生は、三年生の担任でしょ、羨ましいなあ」

不意に、尾田先生は遠くを見つめながらぼやいた。僕が「は？」と聞き直すと、

「一番可愛い時期じゃないですか」

と、言った。

小学生は、一年生から六年生、全部で六学年ある。その中でも小学三年生という時期は、先生方にとって特別な存在となっている。

思春期、反抗期、少年少女が移り変わる時期、それらが来る——手前が、小学三年生だからだ。

「四年生とか五年生になったら生意気に口ごたえばかりで、張り倒したくなってきましたよ。まあ、今のご時世、そんなことできませんけどね」

はっはっはと尾田先生は大口を開けて笑いながら、今来た小学生に気が付いて僕たちは揃って「おはよう」とあいさつした。

「小学生なんて、素直が一番ですよ」